

# 海外文献紹介『実験実存心理学ハンドブック』

中 村 隆 行  
串 崎 真 志

Greenberg, J., Koole, S. L., & Pyszczynski, T. (Eds.) (2004) *Handbook of Experimental Existential Psychology*. New York: The Guilford Press.

## 1. はじめに：「実験」か「実存」か

小論では、グリーンバーグ、クール、ピジンスキー編（2004）『実験実存心理学ハンドブック』（ギルフォード）を紹介する。実験実存心理学という言葉は初めて聞くと、少なからず奇異な印象を受けるだろう。というのも、心理学において“実験”と“実存”は、ともに非常に重要な意義をもちながら、互いに撞着する概念と考えられてきたからである。1879年に、Wundtがライプツヒ大学に心理学実験室を開設し、学問としての心理学が誕生して以来、実験心理学は心理学の主流となってきた。実験心理学は厳密な実験的方法によって、比較的単純な人間の行動の基礎的メカニズムの解明を目的にする。一方、実存主義的心理学は、人間の本性や生きる意味といった抽象的な問題を扱っている。しかし、実存的問題は、人間にとって切り離すことができない深遠な問題であるにも関わらず、高度に抽象的すぎて、科学的方法では十分に焦点を当てることができないと考えられてきた。まさに、Yalom（1980）が、心理学の研究結果の正確性は変数の些細さに直接比例する、と批判した通りである。

実験実存心理学は、この批判に応じて、近年目覚しく発展してきた認知心理学が、その知見

や手法を用いて実存的問題を理解しようという試みである。本書の目的は、実存的問題を社会心理学の最前線で扱うことにより、実験実存心理学という分野を活性化し、人間の本来性（authenticity）や慈善（venevolence）を直接対象にしながら、これらの議論や発見を奨励することであるという（Pyszczynski, Greenberg, and Koole, 2004, p.9）。

本書は、① Introduction, ② Existential Realities, ③ System of Meaning and Value, ④ The Human Connection, ⑤ Freedom and the Will, ⑥ Postmortemの6部30章から構成される。このうち、序論である第1部と事後分析である第6部を除く4部は、主にYalom（1980）のいう実存的関心、すなわち、死、自由、実存的孤立、無意味に拠っている。それぞれの章では、これらのうち少なくとも一つあるいは複数のトピックを扱っている。

本書全体を紹介するのは不可能なので、小論では実験実存心理学の中心的役割を担っているTerror Management Theory（TMT）について紹介したい。以下、いくつかの章について要約を試みつつ、重要研究をあわせて解説する。最後に、文献一覧を付したので、理解の一助になれば幸いである。

## 2. テラー・マネジメント理論（TMT）

第2章“Twenty Years of Terror Management Theory”（Solomon, Greenberg, & Pyszczynski, 2004）では、TMT研究の第一

人者である著者らが、TMTの基礎となる理論や、これまでのTMT研究を概観している。TMTは、文化人類学者のErnest Beckerの一連の研究を元にした理論である。Becker (1973, 訳書1989) によると、死の観念こそ人間活動の推進力であり、人間の活動の主な目標は、死が人間の最後の運命であることを否認、拒絶することであるという。つまり、彼の考えでは、人は一方で自己保存の本能、すなわち生きながらえることへの基本的欲求をもっているが、他方では自己意識により自らの死ぬべき運命にも気づいてしまった。彼によれば、この実存的ジレンマを解消することが、人間行動の真の動機なのである。我々は、自分がいつか死んでしまうことを知っていながら、日常生活で死の恐怖に煩わされることはほとんどない。我々が、実存的ジレンマを抱えながらも、心理的な安静を得られるのはなぜだろうか？

Beckerによれば、この疑問を解消してくれる観念の一つが、ヒロイズムである。人は、自らの生きる世界でヒーローとなり、自分の存在価値を示し、自分の身体的死後にも自己の存在を示すことによって、象徴的不死性を得ることができる。そして、人がヒーローになることができるように枠組みを与えるのが、文化である。少し長くなるが、重要なポイントなので引用しておこう。“その文化のヒーロー体系が、あからさまに呪術的、宗教的、原始的であるか、世俗的、科学的で、文明化されているかは問題でない。いずれにしても、それは、人々が第一の価値、宇宙での特別の地位、森羅万象に対する究極的有用性、ゆるぎない意味、という感情を獲得するために使える神話的なヒーロー体系なのである。人々は自然の中に居場所を切り拓いたり、寺院、大聖堂、トーテムポール、摩天楼、三世代にわたる家族という、人間の価値を反映する大建造物や組織を構成することによって、この感情を獲得する” (Becker, 1973, 訳書1989,

p.25) ののである。

### 3. 「自尊心不安緩衝装置仮説」と「死ぬべき運命の顕現化仮説」

上記のBecker (1973) の主張に基づき、TMTでは、死に対する潜在的恐怖を対処する資源として、「文化的世界観」(cultural worldview) と「自尊心」(self-esteem) を仮定する。文化的世界観とは、ある文化に共有された価値観や信念体系が、個人に内化されたものを指す。自尊心とは、文化的世界観への適合によって得られる、有意義な社会的構成員としての自覚をいう。これらの仮定から、実証的に検討可能な2つの基本的仮説が導き出される。一つは、“もし自尊心が特性的または状態的に強ければ、死の予期から受ける脅威は小さい” という「自尊心不安緩衝装置仮説」(self-esteem as anxiety buffer hypothesis)、もう一つは、“もし文化的世界観や自尊心が不安緩衝装置として機能するのであれば、死の恐怖が顕現化されると、文化的世界観を防衛する欲求や自尊心の獲得・維持欲求が高くなる” という「死ぬべき運命の顕現化仮説」(mortality salience hypothesis: MS仮説)である (Solomon, Greenberg, & Pyszczynski, 2004)。

この2つの基本的仮説に加えて、さまざまな付随的な仮説が実証的に研究されてきた。例えば、Greenberg, Solomon, Pyszczynski, Rosenblatt, Burling, Lyon, & Simon (1992) は、自尊心不安緩衝装置仮説を支持する結果として、パーソナリティ検査やIQテストの偽りのフィードバックによって、一時的に自尊心を高められた被験者は、解剖や電気椅子のシーンを見せられた後の自己報告的不安や予期的な電気ショックに対する生理的覚醒 (皮膚伝導性) が低いこと示した。MS仮説を支持する研究としては、Greenberg, Pyszczynski, Solomon, Rosenblatt,

Veeder, Kirkland, & Lyon (1990) が挙げられる。自分自身の死について考えさせる処理 (MS 処理) を行われたキリスト教徒の被験者は、統制群の被験者よりも、キリスト教徒を友好的に評価し、ユダヤ教徒を敵対的に評価するという。

#### 4. 死の脅威に対する「二重処理モデル」

次に、第3章 “The Blueprint of Terror Management” (Arndt, Cook, & Routledge, 2004) を見てみよう。第3章では、TMTの認知的側面に焦点を当て、人間の社会的行動に影響する死の意識的、無意識的知覚について説明している。数多くの研究の蓄積から、死の脅威を防衛する認知処理モデルとして、「二重処理モデル」(dual - process model) があるという (Pyszczynski, Greenberg, and Solomon, 1999)。このモデルでは、死の脅威に対して、「近接的防衛」(proximal defenses) と「遠位的防衛」(distal defenses) が行われると仮定する。まず、死ぬべき運命が顕在化され、それが意識の中心にあるときには、近接的防衛によって死に関する思考が抑圧・否認されるという。その後、死に関する思考に焦点的注意は向けられていないが、それが高いアクセシビリティ状態にあるとき (つまり無意識的に活性化されているとき) には、遠位的防衛として文化的世界観の固着や自尊心の高揚・維持欲求が高くなるという。

#### 5. 死の多面的パースペクティブ

個人的な死を多面的に捉え、シンプルな TMT に一石を投じたのが、第4章 “A Multifaceted Perspective on the Existential Meanings, Manifestations, and Consequences of the Fear of Personal Death” (Florian & Mikulincer, 2004) である。第4章では、①死の恐怖とは何か、②死の恐怖はどのように表出

されるのか、③死はどのように概念化されるのか、について述べている。死に対する恐怖については、50年代半ばから研究が始まり、多くの研究によって、それは一次元的なものでなく、多次元的事実であることが明らかになった。Florian and Kravetz (1983) は、死の恐怖を Intrapersonal、Interpersonal、Transpersonal の3次元で捉えている。Intrapersonal次元は、死によって人生の目標が達成できなかったり、体が腐敗していくという恐怖、Interpersonal次元は、親密な他者を失う恐怖や、自分の死後に愛する人がどうなるのかという恐怖、そして Transpersonal次元は、死後の存在の不確かさや天罰についての恐怖を指す。このような死の恐怖に対する質的な違いは、宗教の有無 (Florian & Mikulincer, 1992)、宗教の相違 (Florian & Snowden, 1989)、性別 (Florian & Har-Even, 1983)、アタッチメントスタイル (Florian & Mikulincer, 1998) などに関連するという。

それでは、死の恐怖は、どのように表出されるのだろうか。死についての思考は、異なった意識水準で (すなわち意識的表現だけではなく、無意識的にも) 表出される (Florian & Mikulincer, 2004)。Florian, Kravetz, and Frankle (1984) は、死に関する無意識的な思考を検討するため、4枚のTAT (Thematic Apperception Test) 図版を用いて内容分析を行った (TATは比較的、死に関する反応が生じやすいことが知られている)。その結果、高い信頼性をもつ6つの尺度、すなわち、①死の中心性、②抑圧、③不安、④攻撃、⑤罪悪感、⑥否認が得られたという。このように、死の思考に対する多水準的アプローチでは、意識的側面だけでなく無意識的側面にも焦点を当てる。さらに、死の恐怖の多次元的アプローチと組み合わせることによって、より精緻な研究を期待できるだろう。

さらに、Florian & Mikulincer (2004) は、死の現象がどのように概念化されるかについても言及している。Nagy (1948) によると、死の概念の発達には3つのステージに分けられるという。第1ステージ（就学前）では、死の普遍性、不可逆性、不可避性の理解がほとんどない。第2ステージ（5～9歳）では死を擬人化し、死の不可逆性は理解できるが、死を回避可能なものであるとみなす。第3ステージ（9～10歳）でようやく、死の普遍性、不可逆性、不可避性を理解できるようになる。このような死の概念化過程には、文化的環境が大きく影響する。例えば、イスラエルの10歳の子どもを対象にした研究では、イスラム教徒は、キリスト教徒やユダヤ教徒よりも、死の終極性、不可逆性、不可避性などの信念を測る尺度において、より低い得点を示すことが知られている（Florian & Kravetz, 1985）。死は、不可避であると知ることによって初めて、脅威となる（Solomon, Grennberg, & Pyszcynski, 1991）。したがって、このような死の概念の発達の、文化的相違にも着目する必要がある。

## 6. 宗教の心理学的意味

第9章“Religion”（Batson & Stocks, 2004）では、宗教の心理的役割について説明している。宗教は、Maslowのいう基本的欲求や認知的欲求から生じる実存的疑問（例えば、どのように飢えや渇きを満たすのか？ 私はどこに所属しているのか？ 私には価値があるのか？ 人生には意味があるのか？）に、どう答えるのだろうか。宗教の最も大きな心理的役割は、人が自己の存在を知覚しながら、その存在がいつかは消えてしまうという矛盾に苦しむとき、そこに生きる意味を与える点にある。宗教のこのような役割は、Becker (1973, 訳書1989) によって、すでに述べられていた。ただし、現時点の

TMT研究では、不安緩衝装置としての宗教の役割は、未だ限定的で決着していないらしい（Batson & Stocks, 2004）。今後の研究が望まれるだろう。

## 7. 愛情と親密な関係

第18章“The Terror of Death and the Quest for Love”（Mikulincer, Florian, & Hirschberger, 2004）では、愛と死の関連について述べられている。Mikulincer, Florian, & Hirschberger (2004) は、親密な対人関係の進化的、文化的、個人的機能を広範に分析することで、親密な関係を形成し維持する動機について結論づけた。彼らによると、その最大の一つは、自分自身の有限性から生じる実存的脅威を、否認しようとする欲求だという。つまり親密な関係は、実存的脅威に対する不安緩衝装置となる。この結論を説明するために、彼らは親密な関係性の6側面をあげた。すなわち親密な関係は、①進化論的に重要であり、②危険な環境において安全性の源泉となり、③親密な関係を形成し維持することは文化的に価値があり、④自尊心の源泉となり、⑤象徴的不死性を与え、⑥Interpersonalな次元の死の恐怖（例えば、私が死んだあと誰も私のことを思い出してくれない）を、直接的に緩和するという。また、親密な関係が不安緩衝装置であることを支持する実証的研究もある。たとえば、①MS処理を行うと、親密な関係を形成し維持しようとしたり（Taubman - Ben - Ari, Findler, and Mikulincer, 2002）、②親密な関係の崩壊は、死の思考のアクセシビリティを増加させる（Mikulincer, Florian, Birnbaum, and Mashlikovitz, 2002）という。

さらに著者らは、次のように主張する。親密な関係を求める生得的な動機は、文化的世界観が個人に内化される以前に生じる。このことから、死の脅威に対する不安緩衝装置としての親



密な関係は、自尊心や文化的世界観といった他の不安緩衝装置よりも優先するのではないか (Mikulincer, Florian, & Hirschberger, 2004)。このことを検討するため、Hirschberger, Florian, and Mikulincer (2003) は、自尊心が脅かされる状況 (恋人の両親の家で恋人から不満を言われる状況をイメージする) と、自尊心が高められる状況 (恋人から褒められる状況をイメージする) を設定した。その結果、MS群のほうが統制群よりも親密性欲求が高かった。さらに統制群では、恋人から褒められる条件のほうが、不満を言われる条件よりも親密性欲求が高く、MS群では、条件間に有意な差は見られなかった。つまり、死に関する思考が高められると、自尊心を犠牲にしても親密性を求めるというわけである。

また、Hirschberger, Florian, and Mikulincer (2002) は、MS処理が、理想の結婚相手の選択基準を妥協させることも示した。この傾向は、自尊心が高い被験者に顕著であった。おそらく、自尊心が高い人は理想の高い選択基準をもつので、死に直面することによって、それが劇的に妥協されたのだろう。これらの知見は、Rank (1941) のいう「ロマン主義的な解決策」を支持するものである。我々人間は、実存的脅威に対する解決策として、恋愛をはじめとする親密な関係に答えを求めるようだ。

言うまでもなく、恋愛関係に加えて、乳幼児期の母子関係も、最重要な親密な関係である。Mikulincer and Florian (2000) は、親密な関係性が不安緩衝装置としての機能を果たすかどうかは、個人のアタッチメントスタイルによることを示した。Mikulincer and Florian (2000) によると、不安定な愛着の持ち主は、死ぬべき運命の顕現化に対して文化的世界観防衛を行うが、安定した愛着の持ち主は、親密な関係それ自体が不安緩衝装置の役割を果たすので、文化的世界観防衛を行う必要がないという。

## 8. 死のメタファーとしての排斥

第21章 “Ostracism” (Case & Williams, 2004) では、死のメタファーとしての排斥を扱っている。Case & Williams (2004) によると、自分のテリトリーに入ってきた者を撃退したり、他者を食物摂取や交尾の機会から排除する本能は、多くの動物に共通して見られる。しかし、人間の排斥行動はより複雑だろう。社会や集団の規範を維持するため、それに反する行動には、罰として社会的排斥が行われる。社会的排斥は、その人が注意を払うに値しないことを意味する。この点で、社会的排斥は社会的死と同義だ。なぜなら人は、文化や他者から有意味な存在だと認めてもらうことによって、自分はいつか必ず死ぬという実存的脅威と折り合っているからである。排斥が死のメタファーであるなら、次のような仮説が可能かもしれない。つまり、排斥によって死ぬべき運命が顕現化され、その結果、文化的世界観や自尊心による防衛反応がみられる。このことが実験的に研究され、TMTを補足する結果が得られている。

## 9. おわりに：本書の意義

以上、TMTの基礎理論やその認知的側面を概観し、多次元的な死の恐怖、宗教、愛、排斥といった観点から、TMTを補足・修正する知見を紹介した。本書で扱われている内容はすべて、“実験”と“実存”が矛盾しないことを例証しているように思われる。人間にとって、実存の問題は普遍的である。古来より現在まで、哲学、心理学、文学、音楽などさまざまな分野で、実存の問題が扱われてきた。しかし、理論的、抽象的に扱われる限り、どうしても一部の専門家しか、そこに貢献できなくなってしまう (Kooke, Greenberg, Pyszczynski, 2004)。しかし、本書のように、実存の問題に実験的方法を

導入することによって、多くの人が議論に参加することが可能となり、実存的問題をさらに理解、発展させることが期待できるだろう。本書は、これまで矛盾すると考えられてきた“実験”と“実存”の融合を図った点で、大いに意義があると考ええる。

#### 文献

- Arndt, J., Cook, A., & Routledge, C. 2004 The blueprint of terror management: Understanding cognitive architecture. In J. Greenberg, S. Koole & T. Pyszczynski (Eds.), *Handbook of Experimental Existential Psychology*. New York: The Guilford Press.
- Baston, C.D., & Stocks, E.L. 2004 Religion: Its core psychological functions. In J. Greenberg, S. Koole & T. Pyszczynski (Eds.), *Handbook of Experimental Existential Psychology*. New York: The Guilford Press.
- Becker, I. 1973 *The Denial of Death*. New York: Free Press. [ベッカー、今防人 (訳) 1989『死の拒絶』平凡社]
- Case, T., & Williams, K. 2004 Ostracism: A metaphor of death. In J. Greenberg, S. Koole & T. Pyszczynski (Eds.), *Handbook of Experimental Existential Psychology*. New York: The Guilford Press.
- Florian, V., & Har-Even, D. 1983 Fear of personal death: The effect of sex and religious beliefs. *Omega*, 14, 83-91.
- Florian, V., & Kravetz, S. 1983 Fear of personal death: attribution, structure, and relation to religious belief. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 600-607.
- Florian, V., & Kravetz, S. 1985 Children's concept of death. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 16, 174-189.
- Florian, V., & Kravetz, S. & Frankle, J. 1984 Aspects of fear of personal death, level of awareness, and religious commitment. *Journal of Research in Personality*, 18, 289-304.
- Florian, V., & Mikulincer, M. 1992 The impact of death-risk experiences and religiosity on the fear of personal death: The case of Israeli soldiers in Lebanon. *Omega*, 29, 101-111.
- Florian, V., & Mikulincer, M. 1998 Symbolic immortality and the management of the terror of death: The moderating role of attachment style. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 725-734.
- Florian, V., & Mikulincer, M. 2004 A Multifaceted perspective of on the existential meanings, manifestations, and consequences of the fear of personal death. In J. Greenberg, S. Koole & T. Pyszczynski (Eds.), *Handbook of Experimental Existential Psychology*. New York: The Guilford Press.
- Florian, V., & Snowden, L. 1989 Fear of personal death and positive life regard: A study different ethnic and religious-affiliated American college students. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 20, 64-79.
- Greenberg, J., Pyszczynski, T., Solomon, S., Rosenblatt, A., Veeder, M., Kirkland, S., & Lyon, D. 1990 Evidence for terror management theory II : The effects of mortality salience on reactions to those who threaten or bolster the cultural worldview. *Journal of Personality and*

- Social Psychology*, 58, 308-318.
- Greenberg, J., Solomon, S., Pyszczynski, T., Rosenblatt, A., Burling, J., Lyon, D., & Simon, L. 1992 Assessing the terror management analysis of self-esteem: Converging evidence of an anxiety-buffering function. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 913-922.
- Koole, S., Greenberg, J., & Pyszczynski, T. 2004. The best of two worlds: Experimental existential psychology now and in the future. In J. Greenberg, S. Koole & T. Pyszczynski (Eds.), *Handbook of Experimental Existential Psychology*. New York: The Guilford Press.
- Hirschberger, G., Florian, V., & Mikulincer, M. 2002 The anxiety buffering function of close relationships: Mortality salience effects on the willingness to compromise mate selection standards. *European Journal of Social Psychology*, 32, 609-625.
- Hirschberger, G., Florian, V., & Mikulincer, M. 2003 Striving for romantic intimacy following partner complainant or partner criticism-A terror management perspective. *Journal social and personal Relationships*, 20, 675-688.
- Mikulincer, M., & Florian, V. 2000 Exploring individual differences in reactions to mortality salience: Does attachment style regulate terror management mechanisms? *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 260-273.
- Mikulincer, M., Florian, V., Birnbaum, G., & Mashlikovitz, S. 2002 The death-anxiety buffering function of close relationships: Exploring the effects of separation reminders on death-thought accessibility. *Personality and Social psychology Bulletin*, 28, 287-299.
- Mikulincer, M., Florian, V., & Hirschberger, G. 2004 The terror of death and the quest for love: An existential perspective on close relationships. In J. Greenberg, S. Koole & T. Pyszczynski (Eds.), *Handbook of Experimental Existential Psychology*. New York: The Guilford Press.
- Nagy, M. 1948 The child's theories concerning death. *Journal of Genetic Psychology*, 73, 3-27.
- Neimeyer, R. A. 1997 Death anxiety research: The state of the art. *Omega*, 36, 97-120.
- Pyszczynski, T., Greenberg, J., & Koole, S. L. 2004. Experimental existential psychology: Exploring the human confrontation with reality. In J. Greenberg, S. Koole & T. Pyszczynski (Eds.), *Handbook of Experimental Existential Psychology*. New York: The Guilford Press.
- Pyszczynski, T., Greenberg, J., & Solomon, S. 1999 A dual-process model of defense against conscious and unconscious death-related thought: An extension of terror management theory. *Psychological Review*, 106, 835-845.
- Rank, O. 1941 *Beyond psychology*. New York: Dover.
- Solomon, S., Greenberg, J., & Pyszczynski, T. 1991 A terror management theory of social behavior: The psychological function of self-esteem and cultural worldviews. In L. Berkowitz (Ed). *Advances in experimental social psychology* (Vol. 24, pp.93-159). New York: Academic Press.
- Solomon, S., Greenberg, J., & Pyszczynski, T.

2004 The cultural animal: The twenty years of terror management theory and research. In J. Greenberg, S. Koole & T. Pyszczynski(Eds.), *Handbook of Experimental Existential Psychology*. New York: The Guilford Press.

Taubman-Ben-Ari, O., Findler, L., &

Mikulincer, M. 2002 The effect of mortality salience on relationship striving and beliefs-The moderating role of attachment style. *British Journal of social psychology*, 41,419-441.

Yalom, I. 1980 *Existential psychotherapy*. New York: Basic Books.

## 海外文献紹介『障害と心理学：批判的導入と反省』

角 谷 亮 介  
串 崎 真 志

Goodley, D., & Lawthom, R.(Eds.) (2005) *Disability and Psychology: Critical Introductions and Reflections*. London: Palgrave Macmillan.

障害学によって、障害者はマイノリティという立場を自称するようになった。障害学がマイノリティのための学問だとすれば、心理学はマイノリティに対する学問であったのかもしれない。障害学と心理学は、それぞれ異なる歴史、方法、立場をもつ。本書は、そうした2つの学問がお互いの接点を探るという、意欲的な一冊だ。両編者は、障害学の中心地のひとつ、イギリスの研究者である。

内容は、障害学の解放の理論と、心理学の実践の理論を集めたものである。実際は、発展が著しい障害学の立場から、心理学の不徹底な部分に対して、提言を促すものになっている。それゆえ、心理学に携わる人に障害学（特に社会モデル）を紹介するという色彩が強い。

著者は序章において、心理学が障害学にならって反省すべき点を、3つあげている。第一に、心理学が医学モデルで障害を見てきたという点。第二に、反差別立法に照らし合わせて、心理学

を再考すべきときだという点。第三に、心理学は、障害をもつ心理学者の貢献を無視し続けてきたという点。第二の点はイギリスの特殊事情であろうが、残りの指摘は、肯綮（こうけい）に中（あた）っていると感じた。障害に携わる心理学は、これまで、障害者を健常者社会に適応させるようにアプローチしてきた。畢竟、心理学は、健常者社会のための学問になっていたのではないか。

本書は二部構成からなる。第一部は、幼児から成年に至るまでの「無力化」の過程を紹介している。第二部では、障害学の視点をもった心理学のアプローチを模索する。第一部が、「標準からの偏差によってではなく、社会制度化された排除と遭遇の形で、概念化を試みている」ならば、第二部は、「障害者に対するのではなく、障害者とともに働く形で、無力化を変更することに挑戦している」点に特徴があろう。

本書の提言のいくらかは、すでに実践されている。例えば、インペアメントをもつ子どもに対し、専門的な知識をもつサポートワーカーが個別的な支援を行うことなどは、日本においても一般的になりつつある。ヴィゴツキーの発達最近接領域は、この分野における心理学の重